タづる

昔、ある村に一人の貧乏な若者が住んでいました。いつもまじめに働いていましたが、生活は全然楽にはなりませんでした。ある日、いつもと同じように、山へ木を取りに行きました。家に帰る途中で、野原の雪の中につるが倒れているのを見つけました。つるは、羽にけがをして、苦しそうに鳴いていました。若者は、けがをしたところを川の水で洗ったり、薬を付けたりして、助けてやりました。元気になったつるは、何度もお辞儀をして、空へ飛び上がりました。そして、若者の頭の上をゆっくり回ってから、山の向こうへ飛んで行きました。

それから二、三日たった、雪の降る夜、若者が家の中で仕事をしている時、戸をたたく音が聞こえました。

「こんなに夜遅く、誰だろう。」

そう思いながら、若者は戸を開けて見ました。そこには一人の美しい娘が立っていました。

「私は、親類の家へ行くところですが、途中で、道に迷ってしまいました。すみませんが、ちょっと休ませてくださいませんか。」

「それは大変でしたね。どうぞ中に入って、休んで行ってください。寒かったでしょう。さあ、火のそばへ来て、暖かいものを食べてください。」

その夜、親切な若者はその娘を泊めてあげました。次の日、朝早くから娘は、食事の用意をしたり、掃除をしたりして、一生懸命に家の中の用事をしました。その日から娘はずっと若者の家にいるようになりました。

ある日、娘は若者に言いました。

「私はこれから特別の糸で布を作ります。その布ができたら、町へ売りに行ってください。町の人々は、珍しがって、高く買ってくれるはずです。でも私は仕事をしている時は、部屋の中を見ないでください。」

娘は、部屋に入ったまま、ずっと中で仕事をしていました。そして、一週間後に、美しい布を持って、出て来ました。若者は、その布を町へ持って行って、売りました。人々は、

「見たことも聞いたこともない珍しい布だ。こういうすばらしい布なら、高くても買いたい。」

と言って、高い値段で買いました。

若者がお金をたくさん持って、喜んで帰って来たので、娘もうれしそうな顔をしました。その日から若者は、お金がもっと欲しくなり、娘を働かせるようになりました。娘は、だんだん顔色が悪くなり、痩せてきましたが、若者の喜ぶ顔が見たくて、布を作り続けました。

ある日、若者は娘の部屋の中を見たくなりました。

「どうして、あんな美しい布ができるのだろう。ちょっとだけなら、見てもかまわないだろう。」

と思って、娘の働いている部屋へ行ってみました。若者は中を見て、びっくりしてしまいました。部屋の中では、痩せたつるが自分の羽を一本一本取り、それで布を作っていたのです。……（後略）